

〈やまい〉と鬼神——『日本靈異記』中卷第二十四縁考——

山口 敦史

一、はじめに

景戒撰述『日本靈異記』中卷第二十四「閻羅王の使の鬼の、召さるる人の賂を得て免しし縁」⁽¹⁾には、多数の論考がある。本稿では、説話中に表われる「鬼」について、漢籍・仏典との比較において、その性格を考察していきたい。

『日本靈異記』をその説話モチーフから、中国の〈説話〉と比較する視点はよく見られる。しかし、出雲路修氏が指摘するように、単に類似のモチーフのみを以て影響関係を論ずることには慎重であるべきだろう。⁽²⁾

しかし、本説話は、末尾に「大唐の徳玄は、般若の力を被りて、閻羅王の使に召さるる難を脱れき」とあるように、明らかに、孟献忠『金剛般若経集験記』上巻、救護篇三の話を引用している。本説話は『金剛般若経集験記』の説話を明示して引用する唯一の例である。⁽³⁾『金剛般若経集験記』は「般

若験記」として上巻序文にも見える。⁽⁴⁾中卷第二十四では「大唐の徳玄」として、その後、「日本の磐嶋は、寺の商の錢を受け、閻羅王の使の鬼の追ひ召す難を脱れき」と対照させている。このことから、中卷第二十四縁の原拠として、『金剛般若経集験記』を挙げることは首肯されるであろう。⁽⁵⁾

檀磐嶋は、諾楽の左京の六条五坊の人なりき。大安寺の西の里に居住せり。聖武天皇のみ代に、其の大安寺の修多羅分の錢を三十貫借りて、越前の都魯鹿の津に往きて、交易して運び超し、船に載せ家に将ち来らむとする時に、忽然に病を得つ。船を留め、単独家に来むと思ひ、馬を借りて乗り来る。近江の高嶋郡の磯鹿の辛前に至りて、睨みれば、三人追い来る。後るる程一町許なり。山代の宇治椅に至る時に、近く追ひ付き、共に副ひ往く。磐嶋、「何に往く人ぞ」と問ふ。答へて、言曰はく、「閻羅王の闕の檀磐嶋を召しに往く使なり」といふ。磐嶋聞

きて問ふ、「召さるるは我なり。何の故にか召す」といふ。

使の鬼答へて言はく、「我等、先に汝が家に往きて問ひしに、答へて曰はく、『商に往きて未だ来らず』といふが故に、津に至りて求めき。当に相ひて捉へむと欲へば、四王の使有りて、誂へて言はく、『免すべし。寺の交易の銭を受けて、商ひ奉るが故に』といひき。故に暫く免しつらくのみ。汝を召すに日を累ねて、我は飢ゑ疲れむ。若し食物有りや」といふ。磐嶋云はく、「唯干飯のみ有り」といひ、与へて食はしめき。使の鬼云はく、「汝、我が氣に病まむが故に、依り近づかずあれ。但し恐ること莫れ」といふ。終に家に望み、食を備けて饗す。鬼云はく、「我は、牛の穴の味きが故に、牛の穴を饗せよ。牛を捕る鬼は我なり」といふ。磐嶋云はく、「我が家に斑なる牛二頭有り。以て進らむが故に、唯我を免せ」といふ。鬼言はく、「我、今汝が物多に得て食ひつ。其の恩の幸の故に、今汝を免さば、我重き罪に入り、鉄杖を持ちて、百段打たるべし。若し汝と同じ年の人有りや」といふ。磐嶋答へて言はく、「我都て知らず」といふ。

三の鬼の中に、一の鬼議りて言はく、「汝は何の年ぞ」といふ。磐嶋答へて言はく、「我が年は戊寅なり」といふ。鬼云はく、「吾聞くならく、率川の社の許の相八卦

読にして、汝と同じ戊寅の年の人有り。汝に替ふべき者なり。彼の人を召し將む。唯し汝が饗に牛一頭を受けつ。我が打たるる罪を脱れしめむが為に、我が三の名を呼びて、金剛般若経百巻を読み奉れ。一の名は高佐麻呂、二の名は中知麻呂、三の名は槌麻呂ぞ」といひて、夜半に出で去る。明くる日見れば、牛一かしら死にたり。磐嶋、大安寺の南塔院に参る入り、沙弥仁耀法師「未だ受戒せざりし時なり。」を請けて、金剛般若経百巻を読み奉らむと欲ふと語る。仁耀、請を受けて、二箇日を経て、金剛般若経百巻を読み訖りぬ。三箇日を歴て、使の鬼来りて云はく、「大乘の力に依りて、百段の罪を脱れ、常の食より復飯一斗を倍して賜ふ。喜し、貴し。今より以後は、節毎に我が為に修福し供養せよ」といふ。即ち忽然に失せぬ。磐嶋年九十余歳にして死にき。

大唐の徳玄は、般若の力を被りて、閻羅王の使に召さるる難を脱れき。日本の磐嶋は、寺の商の銭を受け、閻羅王の使の鬼の追ひ召す難を脱れき。「花を売る女人は、切利天に生る。毒を供する掬多は、返りて善心を生ず」と者へるは、其れ斯れを謂ふなり。

また、中巻第二十四縁と類似の説話として、中巻第二十五縁を挙げる事ができる。ここでは「鬼」は「疫神」と同一と表現されているように読める。⁶⁾

讚岐国山田郡に、布敷臣衣女といふひと有りき。聖武

天皇のみ代に、衣女忽に病を得たりき。時に偉シク百味を備けて、門の左右に祭り、疫神に賂ひて饗しぬ。閻羅王の使の鬼、来りて衣女を召す。其の鬼、走り疲レニテ、祭の食を見て、^{オセネ} 廻リテ就きて受く。鬼、衣女に語りて言はく、「我、汝の饗を受くるが故に、汝の恩を報いむ。若し、同じ姓同じ名の人有りや」といふ。(以下略)

ここでも「鬼」は人間から食料の供応を受ける。本稿では中巻第二十四縁の「鬼」を中心として、鬼が病氣の原因とされている理由、また、鬼を供応する意味―動物の犠牲によって―の二点の問題を中心に考察する。

二、病氣の原因としての「鬼」

本説話の原拠と思われる、孟献忠撰述『金剛般若経集験記』上巻、救護篇三を一部引用する。

宗正卿竇徳玄は、麟徳元年中、揚州の按察に使はされ、淮水を渡る。船已に岸を去ること数十歩にして、岸上に一人あるを見る。手に小幘を齎ち、形容惨悴たり。日復た暮れむとして、更に余船無し。徳玄これを惑みて、船を却きて岸に就かしむ。此の人を喚びて船に上げて同に渡る。中流に至りて、玄食する次に併せて之に食を与ふ。乃ち渡り訖るに至りて、其の人馬の後を離れず、行くこと数里なるべし。玄問いて云う、「汝は是れ何人」と。答えて云う、「是れ鬼なり。王、揚州に於いて竇大使を

追わしむ」と。玄云う、「竇大使名は何」と。答えて云う、「名は徳玄なり」と。玄即ち守鬼に求めて、「何の方便を作して免を得るや」と。鬼云う、「甚だ愧ず。公食を賜う。公のために先に去る。公但だ金剛般若経を一遍を誦せば、即ち来りて相報ず」と。玄揚州に至り、一月余日を経る。誦経数足る。其の鬼即ち来りて云う、「公の経数已に足る。大好にて終わる。須く相隨いて王に見るべし。是に於いて公却きて房に入れ」と。因りて便ち悶絶し、一宿を経て始めに覚む。初め鬼と相隨い、一所に至る。高門戟を列ねて、大州門の如し。鬼曰く、「請う、公しばらく此某に住せよ。当に先に王に報ずべし」と。鬼即ち先に入る。玄屏障に於いて遙かに聴聞す。王、鬼に語りて曰く、「爾、他のために計を作す」と。遂に鬼を答うつこと三十。鬼即ち出でて来りて袒して示して云う、「公のために喫杖れぬ」と。便ち玄を引き入れて、一の紫を著る人、階を下りて相揖して曰く、「公大功德有り。尚未だ来るべからず。請わくは公即ち還りて門を出でよ」と。坑に落ちて便ち覚む。其の鬼また来る。玄を見て食及び錢を索む。玄即ち食及び紙錢を与う。鬼云う、「猶お傍厄あり。須く道士をして上章を遣わすべし」と。(以下略)

『日本霊異記』中巻第二十四と『金剛般若経集験記』説話の一番の共通性は、「鬼」は空腹であり、人間からのほどこし

を要求する、という点である。また、地獄の王の命令に背くと鞭打ちの刑に処せられることも記されている。相違点としては、靈異記中巻第二十四では、「鬼」は「氣」を持っていて、それに触れると人間は病気になる、という発想が見られる点である。⁽⁸⁾

「鬼」が病氣の原因になるという発想は、山上憶良「沈痾自哀文」(『万葉集』巻第五)に見られる。⁽⁹⁾

嗟乎媿^{はつか}しきかも。我何の罪を犯してか、この重疾に遭へる。(未だ過去に造りし所の罪か、若しくはこれ現前に犯す所の過ちなるか知らざるを謂ふ。罪過を犯すことな^くして、何ぞこの病を獲むや。)(略)吾身の已に俗に穿たれ、心もまた塵に累はさるるを以て、禍の伏す所、崇の隠るる所を知らむと欲し、龜卜の門、巫祝の室、往きて問はずといふことなし。若し実、若し妄、その教ふる所に随ひて、幣帛を奉りて、祈祷せずといふことなし。然れども弥苦しみを増すこと有りて、曾て減差することなし。(略)「晋の景公の疾みて、秦の医緩の視れども還りしことを謂ふ。鬼の為に殺されると謂ふべきなり。」(略)何に況や、生録未だ半ばならずして、鬼の為に枉げて殺され、顔色壯年にして、病の為に横^{はしま}に困めらるる者や。(略)「志恠記に云く、(略)今妖鬼の為に枉げて殺され、已に四年を経たり。(略)任徵君曰く、「病は口より入る。故に君子はその飲食を節す」といふ。これ

に由りてこれを言へば、人の疾病に遇ふことは、必ずしも妖鬼ならず。(略)乃ち知る、我が病は蓋しこれ飲食の招く所にして、自ら治むること能はざるものか。(以下略)

ここで憶良は自分の病氣の原因について思いを巡らす。まず過去・現在に犯した罪のせいだろうかと考える。また「禍」「祟」が原因かとも考え祈禱をしたが効き目がなかった。病氣で死ぬのは「鬼」が原因と言う一方で、口からはいる食料が原因かとも言い、必ずしも「妖鬼」のせいではない、とも言ってみせる。病氣の原因を巡って異なる説を列挙している。これらの記述は、錯綜や混乱などとみるよりも、先行する中国の仏教関係文書や仏典注釈書の議論の形式に類似するとみ^たほうがよいのではないか。

新日本古典文学大系は、智顛説・灌頂記『摩訶止観』巻八上の「鬼はただ身を病ましめ、身を殺す」(大正蔵四十六、一〇七c)を挙げている。⁽¹⁰⁾しかし、憶良の時代に『摩訶止観』が舶載されていたかについては疑問もある。⁽¹¹⁾

ここにもみられる「鬼が病氣の原因」という考えは、偽経などの中国作成の仏教関係文献によく見られる。例えば、『仏説決罪福経』巻上には、「魍魎鬼神、飯食を得るによりて随行入出⁽¹²⁾」の記述を見るように、魍魎魍魎や鬼神が飯を得ることによって人間の体を行き来し、病氣の原因となるという発想が記されている。この考えは、中国の伝統的な祭祀や、

神への供応が、「鬼神」を益する―魍魎魍魎に食糧を供給している―ことにしかつながらないという発想がある。祠や廟の神も、仏教的な立場からはいまわしい「鬼神」でしかないという思想である。このような考え方が八世紀以前の中国に存在し、古代日本もその影響を受けたと考えられる。

三、「鬼」を供応すること

ここで注目したいのは、近年全貌が発表され、注目を集めている名古屋の七寺の新発見經典群である。そのうちのひとつに、『清浄法行經』がある。⁽¹³⁾この經典はこれまで『広弘明集』『破邪論』などに逸文の引用があることから存在は知られていた。この經典は、仏が三人の弟子を中国に派遣したときに、儒童菩薩を孔子、光浄菩薩を顔回、摩訶迦葉を老子と称した、という記述で知られているものである。そこには次のような記述がある。

鬼魔殺鬼、一切諸鬼、魍魎妖魅、禁限有ること無し。

此の門戸を守り、其の宅中に住し、飲食を求望し、諸変恠を作す。人心を恐動し、疾病死喪は災禍し、梟官盜賊怨家債主は陰謀し、口呑室家は善く闘す。歡心有ることなく、子孫興らず、諸弊悪多し。仁義行われず、人の憎む所となる。財物耗減し、種に因りて災傷あり、百事利ならず、皆魔邪の嫉す所なり。鬼世間の妖薛の師をして恐を作るを為さしめ、塞契の語を動かす。妄りに禍禍を

発し犯す所の者多し。心自ら改めず、自ら定むることあ
たわず。卜問して崇殺の時を索び、牛羊鷄鴨豚狗は解し
て奉りて神を下し、請いて邪妖・罔兩・諸鬼を呼ぶ。⁽¹⁴⁾

ここでは「鬼魔殺鬼、一切諸鬼、魍魎妖魅」は「飲食を求望し」、諸種の「変恠」（怪奇な出来事）を起こし、人心を恐怖させ、疾病・死・盜賊・家庭内の災厄・子孫断絶など、ありとあらゆる災害が発生する、とある。また、たとえ「卜問」をして牛・羊・鷄・鴨・豚・狗などの動物を「崇殺」（神に捧げる儀礼の後殺す意か）しても、邪悪な鬼たちを呼ぶだけだとしている。その後の記述で「罪もて仏を奉らず、退きて魔俗に入り、事へて鬼神により、怨心もて悪を行う」とあり、仏陀を崇めず、「鬼神」を祭ることが悪に通じるとしている。

そのあとの記述を見ると、「東北真丹の偏国あり、人民は攏振として多く罪を信ぜず。知りて故に化せんとするも、対して強いて化し難し」なので、「摩訶迦葉」と「光浄童子」「月明儒童」をそれぞれ「老子」「仲尼」「顔淵」と称して、中国を教化させようとする有名な記述に入る。

ここで注目している点は、二つある。ひとつは、「鬼」（「鬼神」）は常に人間からの飲食を希望し、人間に恐怖を与えるという点。もうひとつは、そのような「鬼」からの災厄を防ごうとして動物を殺す儀式を行っても、役に立たない、という点である。これはあくまで「仏」の立場から見た見解であって、ここからは、外来の宗教である仏教と、中国の在

来宗教（例えば廟の神、沼の神など）との対立関係の反映と見るべきである。⁽¹⁵⁾

このような趣旨を、「鬼」を主役として、いわば〈説話化〉⁽¹⁶⁾したものがある。法琳撰述・陳子良注の『辯正論』に次の挿話がある。

久鬼は多慧、能く怪を現じて飽くまでも餐し、新鬼は無知、仏家に入りて転た磨す。『徧略』に云ふ、「新鬼あり、飲食するを得ず。形瘦せて疲頓す。忽に故友に逢ふ。死してより来^{このかた}年を積み、形体肥健す。便ちあひ問訊して、活方を示さんことを請ふ。久鬼は答へて曰く、人の為に崇怪を作すときは、人は必ず大に怖れ、因りて飲食を致す。爾ば乃ち肥健せり、と。新鬼、便ち入りて仏の家に事ふ。其の家は精進して、常に善業を修す。屋の西に磨あり。鬼、往て之を推す。家主、大に喜び、子弟を救^{いまし}めて曰く、吾が家は至りて貧し。善神磨を助く。急に麦を撻^{にな}ひて之に与えん、と。暮に至りて数十斛の麦を磨す。既に食を得ず、疲頓して乃ち去る。復一家に至る。碓に上りて舂く。其の家は正信なり。相与に喜びて曰く、昨日、某甲 家に磨す。今復来りて我が舂を助く、と。益々更に穀を撻^{にな}ひ、婢をして之を簸せしむ。暮に至りて五十斛の米を得。かくの如く疲弊するもまた食を得ず。中心忿怒し、堪任を息めず、夜、久鬼を見るや亟々怨責を伸ぶ。久鬼の曰く、君自ら慮からざるのみ。此の二家

は、仏を奉じて正信なり。其の心は動かし難し。心を用ゆる一に至らば、また能く冥空に感徹せん。我が輩は正に其の使に当らん。今去りて覓^{もと}む可し。門前に竹竿・断索して口を灌ぐ者あり。彼に往いて怪をなせ、と。新鬼、語を用ひ一の家門に至る。桃符・竹竿・断索あり。門に入れば一羣の女子、窓前に共に食するを見る。中庭に一白狗あり。鬼、便ち狗をして空中に在りて、其の家に行かしむ。惶怖し、競ひ唱へて云ふ、生来、未だ此の怪を見ず、と。卜占して云ふ、客鬼は食を索むるなり。狗を殺し餅果を煮、庭中に於て之を祠らば、他なきことを得可し、と。便ち師の言の如くす。鬼、遂に食を得、後ち恆に飽満す。」⁽¹⁷⁾

ここでの「鬼」はいつも空腹で、人間を怖がらせて供応の飯をいただいている。しかし、仏を奉じている家には通用しない。中国伝統の「桃符・竹竿・断索」などの習俗を行っている家では、「鬼」を恐怖して犠牲を捧げて祭祀をする。中国伝統の犠牲・祭祀も、「鬼」を満腹させるものに過ぎないという発想である。これらは仏教側から見た、「鬼」への施しは災厄を招くだけ、という思想の表れと見ることが出来る。『清浄法行経』には、鬼は病気の原因であり、犠牲の祭祀は鬼を喜ばせるだけ、といった思想が見られる。その思想は、『辯正論』において「久鬼」「新鬼」が主役の〈説話〉となり、思慮の足りない鬼が、はからずも人間に利益を与えてしまう

という個体像を形成することになる。

その個体像としての「鬼」のあり方は、『金剛般若経集驗記』上巻、救護篇三や、『日本霊異記』中巻第二十四縁における「鬼」の表現に影響を与えているのではないか。少なくとも共通の思想的基盤に支えられているとは言えるのではないだろうか。これは直接に当該典籍を出典として継承していったというよりも、共通の思想的基盤の上に立って各典籍があると考えるべきだろう。

『金剛般若経集驗記』『日本霊異記』とも、「鬼」への供応は飯を食わせることと、「金剛般若経」を誦することになっている。ここでは「鬼」が「大乘の力」(中巻第二十四)に包摂されていて、功德をありがたがる存在になっている。

四、まとめ

『日本霊異記』中巻第二十四縁における「鬼」の思想的基盤について、中国作典籍との比較において考察した。『日本霊異記』説話の、東アジア仏教文化圏における位置づけを試みた。『日本霊異記』には多種多様な「鬼」が登場するが、本稿ではその性格の一端について論じたのみである。中巻第二十四縁のものについても、論じられるべき問題が多い。それらについては、後考を俟ちたい。⁽¹⁸⁾

注

- (1) 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』(新編日本古典文学全集、小学館)を一部改変。傍線は引用者。以下同じ。
- (2) 出雲路修「書評 河野貴美子著『日本霊異記と中国の伝承』」(国文学研究)第百二十五集、一九九八年六月。
- (3) 当該説話の出典が『金剛般若経集驗記』であるという指摘は、古くは、橋本進吉「黑板勝美氏蔵 古鈔本金剛般若経集驗記 解説」(『黑板勝美氏蔵 古鈔本金剛般若経集驗記』古典保存会、一九三五年)にある。
- (4) 『日本霊異記』(新編日本古典文学全集)では、下巻第二十二縁、三十五縁の「関係説話」として『金剛般若経集驗記』が挙がっている。しかし、中巻第二十四縁にあるような固有名が記載されているわけではない。
- (5) 寺川真知夫『日本国現報善悪霊異記の研究』第三章第四節「中巻第二十四縁の形成事情と意図」(和泉書院、一九九六年)でも、『金剛般若経集驗記』の翻案とするのが穏当と述べている。
- (6) 出雲路氏は中巻第二十五縁について、太平広記の記載から「本説話の鬼と疫神とは同一か」としている。また「疫神を祭る風習の意味を説明しようとする説話」とも述べる(『日本霊異記』新日本古典文学大系、岩波書店、一九九六年)。
- (7) 『大日本統蔵経』を私に訓読。
- (8) 〈たたり〉〈気〉を含めた〈やまい〉全般の論考としては、武田比呂男『日本霊異記』にあらわれた〈やまい〉(『日本文芸思潮論叢』ぺりかん社、二〇〇一年)がある。
- (9) 佐竹昭広ほか校注『萬葉集一』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九九年)。

(10) 前掲書。

(11) 『摩訶止観』の日本伝来については、『唐大和上東征伝』に船載記事が見え、これが日本初伝とされる(高崎直道編『大乘仏典 中国・日本篇16 聖徳太子・鑑真』中央公論社、一九九〇年)。よって七五四年前後か。すると、憶良の死去は一般的には七三三年以降まもなくとされているので、時代的に合わなくなる。

(12) 大正蔵八十五、一三二九a。中村不折蔵敦煌本。大堀英二氏の教示による。『仏説決罪福経』については、鎌田茂雄『中国仏教史』第四卷(東京大学出版会、一九九〇年)、第四章第四節に記載がある。

(13) 『清浄法行経』については、『七寺古逸経典研究叢書』第二卷(大東出版社、一九九六年)所収の関係論文に詳しい。また「清浄法行経」(『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会)の記述も参照。

(14) 『仏説清浄法行経』(『七寺古逸経典研究叢書』第二卷)。

(15) 寺川真知夫「神身離脱を願う神の伝承」(『仏教文学』第十八号、一九九四年三月)。同「続日本紀」の宗教」(『古代文学』第三十五号、一九九六年三月)。

(16) 〈説話〉、そしてそれと関連する〈経典〉についての稿者の考えは、拙稿「経典・注釈・説話―日本霊異記の観音霊験譚と経疏―」(『日本文学』第四十七巻第五号、一九九八年五月)、同「古代前期・仏典注釈の世界―善珠撰述経疏の言説を中心に―」(『古代文学会編『祭儀と言説―生成の〈現場〉へ』森話社、一九九九年)に示した。ご参照いただければ幸いです。

(17) 法琳『辯正論』巻第八「信毀交々報ずるの篇」(大正蔵五十二、五三八b、国訳一切経を一部改める)。

(18) 本稿は、拙稿「『日本霊異記』の「祟」と「誅」―東アジアの宗教思想と因果応報―」(『仏教文学』第二十六号、二〇〇二年三月)の内容を受けたもので、記述の上で一部重複があります。ご了承ください。

【付記】 本稿は、大東文化大学日本文学会秋季大会での講演「〈やまい〉と鬼神―『日本霊異記』と比較文化―」(二〇〇一年十月二十四日、於 大東文化大学)に加筆補正を行ったものである。